

---

# ただ春の夢のごとし

Ander 森

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ただ春の夢のごとし

### 【Nコード】

N4397A

### 【作者名】

A n d e r 森

### 【あらすじ】

良く晴れた休日に掃除をしていた結と頼。すると、突然クローゼットから光が・・・！次の瞬間、二人の目の前には見慣れない景色が広がる。なんとそこは幕末、土佐だった！！

## その1 タイムスリップ（前書き）

勉強不足なもので、なるべく歴史に忠実であろうとしていますが違う部分もあると思います。すみません。よかったら教えてください。

## その1 タイムスリッパ

### 1 タイムスリッパ？

今日は土曜日。

まさに、本日は晴天なり！！と叫びたくなるような天気だ。  
「わあー今日とってもいい天気だね。」

彼女の名前は、時内<sup>じない</sup> 結<sup>ゆう</sup>。

15才の高校1年生。

好きな教科は日本史・国語。

好きな食べ物はジャガイモ料理というごくふつうの女の子。

「だから、今日は掃除するんだよ。ねーちゃん！  
ゴロゴロしてないのー！！」

彼は結の弟の時内<sup>じない</sup> 頼<sup>たのむ</sup>。

13才、中学1年生。

好きな教科は英語・数学・英語。  
かなり成績優秀。

「そんなこと言わないで~~~~」

「こちゃこちゃ言わないでさっさと動く！」

ねーちゃんはず、自分の部屋ねー！」  
すかさずホウキとゾウキンを渡す。

ぶつぶつ言いながら、階段を上って自分の部屋へ。  
まず、結の部屋にはいると見えるのが大きな本棚。  
文庫から参考書まで所狭しと並べられている。

机の上にはパソコンとCDコンポ。

奥にはベッドと少し大きめなクローゼット。

ほつぺを真ん丸にふくませ、手を動かしながら言う結。

「何で私が掃除なんかしなきゃいけないわけ？」

今日は宿題が終わったから、

インターネットと読書でもしようと思ったのに・・・。」

「久しぶりにクローゼットの中でも掃除するか。  
何これ？結構思重いじゃん。

頼、ちよつときて手伝ってー」

大声で叫ぶ。

下から、頼が上ってきた。

その時だった！！

急にクローゼットから光が出て

二人を包んでしまった。

そして、光の中の黒い穴の中に吸い込まれた。

「あれ~~~~」  
「わあ~~~~」

そしてまた、光のあるところに放り出された。

上から頼がふってくる。

「いったあゝい。重いんだよ。速くどけ!!」

「ああ、ごめんごめん。」

ゆっくりと結の上からどく。

周りを見渡した。

人がたくさん集まっている所を見ると、  
商店街のようだ。

でも変なのだ。

みんな成人式のように着物を着ている。

そして、結と頼の方をジロジロ気味悪そうに見ながら通って行く。

彼らの頭をよく見るとマゲが結ってあった。

「ねえ頼。ここって一体どこ？」

「日光江戸村じゃない？」

「人間ってワープできる技術もってたっけ？」

「まだないよ。」

「じゃあどこさ、ここは？」

「こんな奇妙なところ少なくとも今の日本にはないと断言できるね。」

「~~~~ん」

「あゝもしかして！！！！！」

「へっどうしたの？」

「ちよつと待つてて、ねーちゃん。」

近くにいた人に走り寄って行った。

結が見るところ、声をかけられた人はかなり引いてるように見える。

二、三言話すと頼がもどってきた。

「やっぱりね。」

聞いたら今、嘉永5年だつてさ。」

「ふゝん。そうなんだ。嘉永と言ったら、天保・弘化・嘉永・安政の嘉永だよね！！」

「……ってちよつと待て……今江戸時代だっけ？」

「どうもそうみたい。」

「タイムスリップしてしまったということ！？」（ガーン）  
すでに結、ムンクの叫びの状態で止まっている。

「ねーちゃん。それを言うならタイムスリップだけど……。」

あと、ここは土佐だつて。」

今まで止まっていた結の目が光った。

「土佐と言ったら山内容堂（豊信）、坂本竜馬、武市半平太、中岡慎太郎とか有名だよな。それと……。」

「ストップ！ねーちゃん。落ち着いて。」

「会えるかな？」

「どうだろうね。日本は広いから。」

「いや。会えるよ。絶対に！！！」

（ああ）。始まったよ。会うつて決めてるなら、聞かなきゃいいのに……。）

「うん。うん。絶対そうだ！」

「それより、ねーちゃん。さっきより、見られてる気がするんだけど。。。」

「うん。それは私も感じてた。でもどうするの？」

「一番目だっているのは服だと思うけど、お金ないよ?」

「そうだよね。しょうがないから、とりあえず人気のないところに行くか」

結と頼が歩き出した。

「まで~~~~~」

後ろを振りむくと役人らしき人たちが追ってくるのがわかった。結と頼は本能的に危ないことを察知し、全速力で走り出した。

~~~~あとがき~~~~

ここまでわたくし Andar の駄文を読んでくださりありがとうございます。

何せ初めてもので。。。。。

「竜馬が行く」を参考にしながら書いています。

これからもバシバシ書いていきたいと思いますので、  
よんでいただけるとうれしいです。( ^ 0 ^ )



## その2 坂本家

「ハアハア……。逃げ切れたかなあ。」

「……。たぶん。はあはあ。」

結も頼も肩を上下に動かして呼吸をしている。

「怖かった。刀、振り回して追っかけてくるんだもん。死ぬかと思った。」

今度は後ろからパツカパツカと馬の足音が聞こえた。

女の人に乗っている。

そして、結と頼の横で止まってこっちをふりむいた。

そして乱暴に

「わたしについといで！！」という言葉を残し走り去った。

結と頼は訳もわからず走って彼女の後についてった。

人間の足が馬の足に追いつくはずがない。

特にマラソンが大の苦手な結にとってはつらい。

女の人に乗った馬は商店街を越え、

一件の屋敷の中にある馬小屋の前に止まった。

そして、馬からハラリと降りた。

その姿はほれぼれするほどさまになっている。

背も高い。だいたい172センチくらいあるのではないだろうか。

そして、彼女は切れ長の目で、骨董品を眺めるプロの目つきで、

結と頼の頭の中から足のつま先まで丹念にみた。

彼女は結んでいた口を開いた。

「あたしの名前は坂本乙女。あなたたち、何でそんな奇妙な格好してるの？」

「名前は？国は？……」

次から次へと質問が滝のように流れ出る。

「ち・ちよつとまってください。私の名前は時内 結です。こっち  
は弟の頼。」

なぜこんな格好をしてるかっていうと……」

いったん言葉を切る。

乙女の目が結を捕らえた。

（言ってしまうのか、どうしようか……）

結の瞳が左右に揺れる。

しばらく沈黙が続く。

乙女が答えを待っているのがわかる。

（ああ……この際いっちゃうぞ。どうなっても知くらない!!）

「実は……」

「実は？」

「あの」

「あの？」

「その」

「いいかげんにはつきり言ってちょうだい!!」

いらいらしてる。

「あ・はい！実は私たち未来から来たんです!!」

沈黙……。

「は???ミライ・・・???」

乙女の頭の上に?マークが浮かぶ。

「ずーっとずーっと先の時代のことです。」

「へえー。信じられないけど、その着物見ちゃうと信じないわけにはいかないわね。

さっき来たの?」

「そうなんです。これからのこと姉と話してたら乙女さんが来た次第です。」

「じゃあ。帰る家がないってこと?」

「はあ。そういうことになります。」

「帰れるまで住みなよ!うちに。」

「えっ!いいんですか?」

結の目が宝石のように輝いた。

「いいよ。困ったときにはお互い様よ!」

笑顔で答えた。

このとき、結と頼には『天使の微笑』に見えたそうな・・・。

「ところでこの先の世はどんな感じなの?」

「時代を変えたくないの、そんなに詳しくは言えないけど・・・。

たとえば、この行燈<sup>あんどん</sup>。」

頼は近くにあった行燈を指さす。

「普通、油がなくなったら、ささなきゃいけないですよね?」

「うん。」

「それに、風が吹けば揺れて消えちゃうこともあるし、なにより火事になりやすい。」

しかゝゝし、未来の行燈はスイッチというものを押すだけで明かりがついたり、

消えたりするんです！！すぐに油がなくなって消えちゃうってこともないし・・・

いいでしょ？？」

「なるほどねえ。『すいつち』だっけ？うん！すごいと思う。」

さっきらだまっていた結が口を開いた。

「あのー乙女さん。もしかして弟いますか？」

「うん。いるけど・・・。」

「そして、その人の名前は『坂本 竜馬』ですか？」

「そうだけど・・・。でも、どうしてわかったの？」

乙女は肖像画の竜馬に似た細い目を見開いて答えた。

「竜馬さんって、こっちの世界では有名なんですよ。すると今度は目を輝かせていった。

「それ本当？？」

「もちろんです。」

「やっぱりそうでしょう？歴史に名を残すとは！！！」

さすが私が見込んで、鍛えて、育てた弟！」

一人の世界に入って、感動している・・・。

「よし！ちよつとまってるて！！」

屋敷の中に入ってた。い

その後ろ姿を眺める結と頼。

自然に結の顔から笑顔がこぼれる。

「ねえ、頼。乙女さんっていい人だね。」

「うん。そう思う。それにしても、まさかあの坂本竜馬の家に来て  
しまうとはね。」

中から乙女が出てきた。

「あのね。結ちゃん、頼ちゃん。父がうちに住んでいいって。

先の世のことは話すとややこしくなるから話さないで、

火事で親を失い身寄りがないって言うておいたけど。それでい  
い？」

「「ありがとうございます！！」」

頭を下げる。

「あなたたち。わからないことがあったら、私を姉だと思ってい  
ろ聞いてね！！」

「はい！！じゃあ乙女さんが私の姉なら『乙女ねーさん』って呼ん  
でいいですか？」

「もちろん。言いに決まっているじゃないっ！！」

結の肩を思いつき叩いた。

「そういえばねーさん。馬術と剣術ができると聞いていますが、是  
非教えてください。」

頼も目をきらきらさせながら言う。

「もちろん。いいよ。午後。私、空いてるから。」

「やった~~~~~!」

結がうれしそうに飛び跳ねた。

「ありがとうございます。」

頼も答える。

こうして、彼らは坂本家の居候となったのでした・・・。

## その2 坂本家（後書き）

それがしの乙女のイメージは気の強い面倒見のよいねーちゃんって  
かんじなんですが・・・。

表現できたかな？って思います。

### その3 あったかい家族

日が少し傾き始めたころ、  
坂本家の庭には3つの陰があった。

「ハアハア乙女ねーさん。ありがとうございます。  
竹刀を振るのってこんなに大変なことだったんですね。」

「でも、結ちゃん。そんなこと言うけど  
ちよつとしかしてないのに、馬にも乗れるようになったし、  
竹刀も振れるようになったじゃない。  
これってすごいことよ！！2人とも才能あるわ。  
もう少しだけ見てあ………。

やばい！夕食作らなきゃ！！」

「私たちも、手伝います！」

「助かる！そこにあるそれ取って……。」

「「はいつ。」」



「ああ、腹減ったき……。」

男が言う。

この男、身長約172センチこの時代の人にしては大男である。  
外見は美男子とはとも言えないが、  
目が細く、たれている所が彼を人なつこつそうに見せる。

そう。この男、坂本竜馬である。

彼は家への道を急いでいた。

目の前にはもう坂本家が見えてきていた。

「ただいま帰っちゅう!!」

大きく良く通る声でそういうと、竜馬は中に入った。

すると彼の見たこともない男と女が乙女の夕食作りを手伝っていた。  
竜馬はすぐ隣にいた坂本家の下男、源二郎に聞いた。

「ありゃあだれだ?」

「あの方たちは乙女お嬢さんが拾ってきたのです。」

なんでも、やはり病で両親を亡くしたらしく、

4日間飲まず食わずで歩いていたところを、乙女お嬢さんがかわいそうに思ったらしく……。

なんと優しく成長されて……！！源二郎はうれしいです！」「  
ついには泣きだしてしまった。

「ほき、ととはなんと？」

「旦那様も目に涙をお溜めになって、ぜひうちに来るようにとおし  
やっております。」

（家族が増えるのか……。ほれっちゃんもいいかもしれんな……。。  
）  
竜馬は思った。

るか？」

八平が周りを見回す。

反対意見を言おうとする者は一人もないことをみとめると、結と頼の方を向き、あたたかい笑顔でいった。

「・・・ということだ。結殿と頼殿がよければ是非家族としてお迎えしたいのだが・・・。」

結のすんだきれいな目にじわりと涙が溜まる。

「ありがとうございます！」

「このご恩は一生忘れません!!。」

そうして、竜馬家の食事は始まったのであった。

-----

夕食が終わり、乙女の出してくれたお茶を飲んでいると、

竜馬と春猪はるしごが時内兄弟の所に来た。

春猪は竜馬の兄、権平の娘で13才。竜馬がかなりかわいがっている姪っ子である。

興味津々に時内兄弟のことを尋ねてくる。

「おまんたち、どっから来たか？言葉が違うようやけど・・・。」

「ねえ。おねーちゃん好きな食べ物ある？好きな遊びは！？」

「うう。そんないつきにされると・・・。」結がたじろぐ。

「そんないつきに質問したから結ちゃんも頼ちゃんも驚いてるじゃない！！」

乙女が自分のお茶を注ぎながら注意する。

少しの間、竜馬と春猪がだまる。結と頼がほっとした顔をする。

乙女はお茶を飲みながら考えた。

（この二人には本当のこと話しても大丈夫かな？

結ちゃんも頼ちゃんもきつとワケを知った上で受け入れてほしいはずだもの。）

乙女が考え事をしているのを見計らってまた、竜馬と春猪が質問攻めが始まった。

ピキッ

結の頭の血管が切れた。

「ああ~~~~！うつさいねー。この際、言っちゃうけどね。

私たちは未来から来たの。だから当然土佐弁は使えません！！」

「ああー。いちゃったよ・・・。」

頼が頭を抱える。

「「???ミライ??」」

竜馬と春猪が首をかしげる。

「未来って言うのは、これから来るずっと先の時代のことよ。」

「でも、ねーさん。ほがなことはありえないことだろ。」

「私もそう思ったんだけど、あんたの名前も知ってたし、

それに、何よりも2人の持ち物を見せてもらえば納得すると思うわよ。」

竜馬と春猪が結と頼を見る。

頼が立ち上がり、

用意してもらった結との二人部屋から未来の物を包み込んだ風呂敷を運んできた。

中から結がワンピースを取り出した。

「へ～。こりゃあー奇妙な服だな～。」

「ねえ～結ちゃん。春猪、着てみたいな～。いい？」

「いいよ。」

着るのを手伝ってやる。

「できた！！春猪ちゃん、かわいいよ。似合ってる！！」

うれしそうに春猪が飛び跳ねる。

それを見て何を思ったのか、頼が頬を淡いピンク色に染めた。

### その3 あったかい家族（後書き）

やつと3話がかけた〜。

実は結ちゃん。なんせタイムスリップした時、掃除中だったので、手に持っていた物まで持って来ちゃったんですね。

それは「浪士組 新撰組のすべてがわかる本」、

「幕末倒幕のすべてがわかる本」、

「世に棲む日々」（司馬遼作）

使っていないノート数冊、だそうですよ。

あまりにも近い未来が書いてあって危ないので、いつも風呂敷に入れて持ち歩ってるそうです。（＾０＾）  
かなり長くなると思います。

末永くよろしくお願いします。

よかったら感想ください。（m。―。）m

## その4 協力のしるし

あつという間に数ヶ月を過ぎた。

その間に時内兄弟の剣術、馬術はとどまるところを知らず、ついに乙女を超えてしまい、今は竜馬に稽古をつけてもらっていた。

「ほがーに、竹刀を振り回したいのなら、日根野道場に入門したらがやき。」

それはグットアイデアとばかりに二人の顔がパツと光った。  
でも、すぐに結が顔を曇らせた。

「道場つて女、だめなんですよ？」

「おんしなら男より強いし、なんちゃーがやないだ。第一女に見えない。」

「っそんな！！竜馬兄さん。かなり失礼だよ。それ！！」

確かに、この時代の女の人にしては背は高いし、肩幅も広い、肌も白くないし、

それに・・・」

「やき、男装すればれんつて！！」

「男装・・・。」

（それいいかも やつてみたかったんだよね。）

それに男装すれば竜馬兄さんについて行けるし、

有名人にもあえる・・・。これって一石二鳥だよね！！）

「竜馬兄さん。私、男装する！！！！」

自分で言っておきながら、竜馬がポカンとする。  
すぐに自分の言った言葉を訂正に入れる。

「ちちつくとまった。さっきのはてんごう（冗談）ちや！」

「もう私決めたの。昔、竜馬兄さんが着てた着物ちようだい！」

「てんごう（冗談）だとうちゅうろう。忘れてくれ、な？」

「うるさいな！決めたって言ってるでしょ！分かったらサッサと持ってくる！！」

「はいっつー！」

コソコソと竜馬が取りに行つたのを見て、結が満足そうな顔をした。

袴を竜馬に教えてもらいながら着付ける。

そこにはいたずらざかりの少年が姿を現した。

「女物よりずーと動きやすいんだね！！気に入った（＾＾）」  
かなり上機嫌にるるんである。

結が部屋を出ようとした。

「おい、どこへいくきに？」

あわてて結に竜馬が問う。

「決まってるじゃん。権平兄さん（竜馬の兄）のところだよ！！」

行つて、日根野道場に入りたいてお願いするの。」

当たり前だという顔をして説明する結に竜馬は信じられんという顔をした。

「権平兄さん、失礼します。」

結が権平の部屋に入った。

「結・・・・・・・・か？」

権平が驚く。

なぜなら、正面には結の声をした少年がいたからだ。

その少年（結）はニコニコしながら、権平の前に座ると説明しだした。



「だめだ！」

「お願いします。一生のお願い！お願いお願いお願いお願い……。」

「女子が男の格好をするとは、断じて許せん！」

「そんなこと言わないで、おねがいおねがいおねがいおねがいおねがいおねがい……！」

ついに権平はため息をつき、結を見た。

「……じゃあ聞くが、おまえが道場で男になると言うことは、女を捨てるということだぞ。どんなことがあるうとも、決して武士道から逃げられん。

それでも、良いのか？」

結はその澄んだきれいな目で権平を見つめ、ゆっくりとうなずいた。  
「はい。もちろんでございます。」

権平はやれやれという顔をし、筆で和紙に何かを書いた。  
そして、それを結に見せた。

そこには“跡”<sup>あと</sup>の一字が書いてあった。

「結、男としてのおまえにこの名をやろう。

おまえがどこに行こうとも、ここにはおまえが女であったという跡がある。

これがわしができるおまえへの協力のしるしだ。」  
結の目頭が熱くなった。



#### その4 協力のしるし（後書き）

そんなこんなで結は男装してしまいました。  
これからどうなるのかな。

“o(\* o o)”ウキウキ

## その5 日根野道場

「「よろしくお願いします!!」」

結と頼は深く頭を下げた。

権平からの紹介状を見終えた道場主、日根野弁治はフムと言った。  
しばらく結と頼を穴悪ほど眺める。

そして急に立ち上がると来いと言つような目をして歩き出した。

(ついて来いってことかな?)

あわてて結と頼は弁治を追った。

広い廊下を歩いて連れてこられたのは道場であつた。

道場主である弁治が来たせいか引き締まった空気を感じさせる。

(気持ちいい!!この感触!)

結と頼は感じた。

そんな感受性豊かに感じているところを容赦なくぶっ壊し、

弁治は結と頼に試合を言い渡した。

試合は終わった。

「頼。どうだったと思う?」

「そんなの僕にだって分からないよ」。日根野先生に聞かなくちゃ。

「

不安そうに二人は顔を見合わせていた。

その試合を見て、弁治は驚いた。

（一体この2人は何者なのか？

聞いたところによると、本格的に剣術を始めたのは最近だそうだ。

これはまだまだのびる可能性が大いにある……。

よしっ 目録の持っている鈴木と橘川をつけよう！）

「鈴木、橘川来い！」

「はいっ」

弁治が結と頼を指し示す。

「今日からこの2人の面倒を見てほしい。

名は時内結と頼だ。よろしく頼む。」

「「よろしくお願いします!!」」

2人があわてて頭を下げた。

最初に橘川が結と頼の素振りを教えた。

「これで1000回するんだ。」

木刀を2人に投げてよこした。

（うつ……。竹刀より重いつ!!）

結と頼が素振りを始める。

すると、橘川はふらりとどこかに行ってしまった。

しばらくして、どこからともなくきゅうすと湯飲みを持って現れた。中からは緑茶のいいにおいではなく、ドクダミの鼻を突くようなにおいを漂わせていた。

（何？あの橘川とか言う人、人がひっしに素振りしてるっていうのに、

どこほつつき歩ってたと思ったらドクダミ茶なんて持ってきて！

！)

(ねーちゃん。相当怒ってるなあ。

木刀に力が入ってビュンビュンいつてるもんな。

苛立つ気持ちも分からなくはないけど……。やめた方がいいと思うよ……。)

(ちょっと気、ぬきたくなちゃった。

どうせあの人見てないし……。いいよね。)

少し結は木刀に入れる力を緩めた。

「何やってんだ!! もっと胸張って!!」

橘川の罵声が飛ぶ。

「はいっ!!」

(なんだ。ちゃんと見てんかよ……。)

「何だ。その顔は……。!」

橘川が結に近づいたかと思うと、

結の頭の後ろに手を添え口をこじ開けて、

片手に持っていたドクダミ茶を流し込んだ。

一瞬結は、何が起こったか分からなかった。

しかし、次の瞬間、味覚を感じる舌が急激に反応した。

(にげ~~~~~!! うぎあ~~~~。まじい!!!!)

口を押さえて飛び回った。

橘川が満足そうな顔をした。

「次、そんな顔したら、もっと濃いのにするから!

それと、もう一度最初から、1000回すること……。!」

ガンと思ったが、結はドクダミ茶のことを思っただクガクうなずいた。

（こんなまずい物、口に入れられるなら1000回素振りやる方がましだ〜）。

せつかく950回やったのに……。トホホホ……。)

（ねーちゃん。がんばれ……。）

頼は結がドクダミ茶を飲まされているときに素振りが終わり、鈴木に教えてもらった。

鈴木は無口で鬼コーチ、今まで自分が筋がいいと思ったやつは徹底的にやらないと気が済まなかった。

ゆえに、まだ彼のレッスンについて行けた者は未だないらしい。

鈴木は思った。

（この２人なかなかだ。先ほど教えたことをもう習得している。

こんなやつオレは教えたの初めてだ……。特に跡の方がいい。

こいつは激しい技を繰り出すのがうまい。頼はすばやい。そこを伸ばしてやろう。）

坂本家夕食時。

「乙女ねーさん！ちよつと聞いてよ……！」

あのね、私と頼を橘川さんと鈴木さんって人が見てくれてんだけど……。

橘川さんってすごい酷いんだよ!! だって………

今日も元気な話し声<sup>が</sup>した。





## その5 日根野道場（後書き）

こんにちは！！

今回オリジナルキャラクター出しました。

橘川さんと鈴木さんです。

たぶん次ぐくらいまでしか出ないと思うんですが、  
よろしく願います。

では、また次の話で！！

## その6 旅立ち

メキメキメキとそんな音を立てるごとく結と頼の剣さばきは成長していた。

年末になる頃には2人とも師範である橘川を倒し、鈴木から一本取るまでになっていた。

竜馬も力をつけ、正月の試合では鈴木を一網打尽に倒していた。それを聞いた権平は喜んでお礼とある提案をしに日根野道場に行った。

弁治の前に座っている権平が口を開いた。

「うちの竜馬を江戸に遊学させようと思っておるのですが・・・。」

「それはいいことですね！実はこちらからも言おうと思つたところでした。」

「そうでしたか！！」

権平が驚きの声を上げる。

「どうせ行くのなら、大流儀をまなぶのがよろしいでしょう。

わしの知り合いに北辰一刀流で千葉周作先生の弟、貞吉先生と言う方がいらしゃる。

その方なら紹介状を書いて差し上げられるのだが・・・。」

権平が頭を下げた。

「ぜ、ぜひお願いします！！」

「それとうちに預かっている跡と頼のことだが・・・。」

「はー。」（？）

「ぜひ彼らにも田舎剣術でなくちゃんとした剣術をやらせたい。金はうちで出しましょう。一緒に行かせてはどうだろうか？」

権平はパツと目を開かせ、興奮気味に言った。

「そうさせましょう！！それは3人とも喜ぶことでしょう。  
しかし、金の方は私に出させてください。」

そうして、3人の江戸遊学は決まったのだった。

その時ちょうど乙女の入れた緑茶を飲みながらくしゃみをしていた。

――――

竜馬、結、頼の3人は嘉永6年3月17日江戸へと旅発った。

慣習により、親戚。知人、道場仲間が領石まで見送りに来た。

竜馬は一人でこれから故郷になるであろうこの城下町をしつかりと目に焼き付けながら歩いていった。

頼は道場仲間とワイワイふざけながら歩いている。

結は困った顔をしながら女たちに囲まれながら歩いていた。

結と少しでも目が合うとキャツと黄色い声をあげるのだ。

急に横を歩いていた鈴木が結に話しかけた。

「おまえ両手に花だな。本当に！！」

結の周りを見ながらため息をついた。

「そういう風に言つて、からかわないでくださいよ～～！」

ますます結の顔が困ってきていた。

なぜこんなに結の周りに女が群がっているのかというと、ある雨の日。

結が傘を差しながら歩いていると女の声がした。

「やめてくださいー!!」

そちらの方を見ると若い女がチンピラにからまれていた。

結は急いで刀を抜き、女とチンピラの間に立った。

「ちよつと兄ちゃんどいてくれねーかい？そいつはオレの獲物だ。」

「女性を好き勝手に傷つけるなんて許せない・・・。」

「うるせーどけつてんだよ!!」

急にチンピラは結に斬りかかってきた。

それ受け止め、チンピラの刀を跳ね上げる。

そして、チンピラがバランスを崩したところを峰打ち。

カチャツという結の刀をしまう音がしたとおもつと、

ドサリと言うチンピラが倒れる音がした。

「娘さん。大丈夫でしたか？」

結が心配そうに若い女に手を差し出した。

「はい。ありがとうございました。助かりました。」

立たせながら結は女の髪が濡れているのが分かった。

「あつ。雨に濡れてしまったようですね。」

「これじゃあ風邪引きますよ!!」

結はその女に着てきた上着を肩にかけてやり、差してきた傘渡してやった。

「こんな！悪いです。私・・・。」

「ああ、気にしないで！馴れてるから。それでは!!」

結は頭を手に乗せると雨の中に走り去った。

女はピンクにきれいに染まった頬に手を当て結の去った跡を眺めていた。

この女の名前をお京といった。

それからというものの彼女は仲間の女たちを引き連れ、  
結の現れる場所に出没し結を困らせろのだった。

しかし結にはなぜこんなに多くの女が自分の周りにいるのか  
最後まで理解できなったらしい。

こうして竜馬、結、頼は江戸に夢を抱きつつ旅だったのだった。

## その6 旅立ち（後書き）

こんにちは!!

毎度読んでいただきありがとうございます（o^ ^o）ノ  
今回どうだったでしょうか？

題名と内容ちよつと違っていた気もするんですけど・・・。  
とにかく、結ちゃんは野暮天だ!!...ッてことが書きたかったんです。では、次話でお会いしましょう!!

## その7 F U T O N M U S H I 事件

関所を抜け江戸の町に入る者の姿が3つあった。

「これが江戸か……！！活気が大阪とはまた違っていいね！  
現代にいればゼツタイ体験できなかったよ。感激」

第一声を大きな声で結が飾る。

「結、興奮しすぎがやない。」

「うるさいよ……。ねーちゃん。」

竜馬と頼があきたように結を見ながら言う。

「はい、そこ……！！私の名前は結でもねーちゃんでもなあーい！！  
跡大王という名前である。2ともそう呼びたまえ！！  
アハハハハ。」

ところでさあー頼は有名人に会えると思う？」

「さあね。日本は広いからね。会えないんじゃない？」

「そんなことないよ！ゼツタイ会えるんだもん！！」

結が頼をふくらませてぶんぶん言う。

（ほんなら、聞かえきやいいがやき……。）

2人のやり取りを見ながら竜馬は思った。

そして、結というガキを連れた一行は足をすぐ藩邸へと向けた。

藩邸で、必要な手続きが終わると、

今後生活するであろう部屋を見せてもらった。

「わあーきれい！」

結が歓声を上げる。

「相部屋は誰じゃ？」

竜馬が眉をひそめながら言う。

「武市先生ですが……。」

「半平太か……。」

竜馬の顔が不満そうな顔をし、ため息をついた。

-----

その夜、半平太に心酔しきっている若者たちが

半平太に対する竜馬の態度を聞いて怒り、

布団蒸しにしようと半平太の部屋（竜馬・結・頼の部屋でもある）

で、

竜馬を待っていた。

「先生を馬鹿にするなんて……。ソレガシは許せません！！」

「同感！！」

「よって我々は不屈き者竜馬に天誅を加えます。」

「竜馬は昔からそうゆう奴だから、私は怒ってはないのだが……。」

美男子という部品を持ち合わせた半平太は苦笑いしながら良く通る声で言った。

「いや！先生が例えおっしゃっても私たちは許すことができません！！」

その時、入り口の襖が開き、結、頼と禪一丁の竜馬が現れた。  
次の瞬間、一人の者が行燈の火を消した。

それを合図に若者たちが声を上げて飛びかかって来た。



時内兄弟は天誅（布団蒸し）の邪魔をしないように1人ずつ別に捕まっていた。

「離せ〜〜〜〜！」

おとなしく捕まっている頼に対し、結は暴れた。

「おとなしくしてろ。」

「何にもしないから、離せって言ってるの！！」

「うるさい、黙れ。危害は加えん。」

「離せば黙る！」

男が結を無視して言う。

「おまえ見た目以上に華奢だな・・・。」

「はっ、な何を！？」

（それって太って見えたってこと？普通レディーそういうこと言わないよね！！）

「女みたいだ。」

（みたいじゃなくてそうなの！！）

ゲツてつちよと待てよ・・・。女だつてばれちゃ行けないんだつた！つい忘れてしまった。

私としたことが・・・！どうしようどうしようどうしよう・・・。（

するとすぐに、ドタドタする音が消え、行燈がともされた。

結と頼が解放される。

どうやら決着がついたらしい。

若者たちが布団の下で苦しんでいる竜馬を一目見ようと近づく。

なんと布団に埋まっていたのは憎き竜馬ではなく、師である半平太の姿であった。

若者たちも結も頼も啞然とした。

そんな中、禪一丁で油を体に塗り皆が捕まえにくくしたあげく、半平太を身代わりにした竜馬はコソコソと部屋を出て行ってしまっ

た。

それにならうようにして若者たちも半平太の上に積み上がった布団と共に去った。

「あのー武市半平太さん？大丈夫ですか？」

結が遠慮がちに聞く。

「どうぞ、水です。」

頼が湯飲みを差し出す。

受け取った半平太は一気に喉に流し込んだ。

「ぶはっ！。苦しかった。あいつらめ、調子に乗りあがって……！だから私はやらなくて良いと言ったんだ……。」

そして、結と頼に気づいた。

「ああ君たち、見苦しいところを見せてすまなかった。

権平殿からは手紙をいただいておる。名はなんと言ったかな？」

「私、時内跡と申します。」

「僕は頼と言います。」

「そうか跡に頼。藩邸へようこそ。

分からないことがあったら何でも聞いてくれ。」

半平太がほえんだ。

「「はい！！」」

2人が元気に返事をする。

「君たち、年はいくつなんだ？」

「兄が15で、僕が13です。」

「まだ、若いな。よし、私が勉強を教えてやろう。暇があるときおいで。」

「ありがとうございます！」

「あのお願いがあるんですけど……。」

結がモジモジしながら半平太に聞いた。

「うん？なんだ？」

「これに名前書いてください！！」

結が持つて来てしまったノートを半平太の前に差し出した。

「これにか？」

「はい。」

半平太は自分の矢立をを取り出すとササッと書き上げた。

「こんなのでいいのか・・・？」

「はい！ありがとうございます！」

（武市半平太だって！！有名だもんね！サインもらっちゃった。ルン  
ルン）

こうして、結のサインを集める趣味は幕を開けたのだった。

## その7 F U T O N M U S H I 事件（後書き）

こんにちは！久しぶりです！！

今年のGW、皆さんはどこ行きましたか？

私は群馬の草津温泉に行きました。

気持ちよかったです。

やっと江戸に来ました。

アイディアはバンバン浮かんでくるのだけど、

打つ時間無くて・・・。

がんばります（<ο>）ノ

結の幕末サイン帳

No、1 武市半平太

（土佐藩、尊皇攘夷派）

## その8 夢桜

武市半平太。

江戸の遊学中に尊王攘夷派になり、土佐勤王党を結成。

土佐藩内を尊皇派にしようとし、郷土であるにもかかわらず疾走。  
夢半ばに切腹を命ぜられ果てる。

そんな未来を抱えた彼は今、少年たち（？）に勉強を教えていた。  
半平太が教科書にしているのは頼山陽の『日本外史』である。  
それを見ながら半平太の口から繰り出される言葉は巧みで  
彼に心酔する者が多いのを納得させる。

目の間には、かわいらしいまつげをパチパチさせながら、  
頼が真剣な眼差しを向ける。  
その横でノートの筆記に追われる結は、  
シャーペンが無く大変そうだ。  
部屋の隅では竜馬が鼻毛を抜きながら退屈そうに寝っ転がっている。  
その隣には刀を抱き、時々熱っぽく青年が目を向けていた。

「「ありがとうございます！」「」  
結と頼の声がした。

半平太の話が終わったらしい。

結が立ち上がる。

「お茶、飲む人。手挙げて……！」  
余談だが、結の入れるお茶は千利休も驚くほど天下一品である。  
平たく言うとおいしいのだ。

「ちょうど喉が渴いた頃合いだ。頼むかな。」

半平太が少し手を挙げる。

「ハイー！！僕のも！！」

頼は元気よく言う。

竜馬はうるさいと言う顔をしてに頼の方を一別すると、面倒くさそうに手を挙げた。

そんな中きよんとしている青年に結がニツコリ笑いながら聞いた。

「お茶、お飲みになりますか？」

「はあ。お願いします。」

結から視線をずらしながら青年はそう答えた。

その答えを満足そうに聞き、結は台所の方へ歩き出した。

台所に入って、

まず、お茶を入れるためにすることは湯を沸かすこと。

現代ならばコンロの元栓をねじってひねれば火がつくが、

この時代はそうも行かない。

火打ち石を使って火をつけるのだ。

土佐にいた頃はずいぶん苦労したが、

今ではこちらの人よりも少し速いくらいのスピードで火がつけられるようになった。

火をつけ湯を沸かし、湯飲みに湯を入れる。

そして、お茶っ葉の入った急須戻し、再度注ぐ。

これがおいしいお茶の入れ方である。

黄緑色にきれいに染まったお茶が入った。

「やったー！！今日も成功！！」

・・・それにしてもあの人誰だろう？」

竜馬の隣の青年を結は思い出した。

トコトコ、お茶の入った湯飲みのお盆を持って、

結は部屋の前に立ち足で襖を開けた。

スパーンといい音を立てて襖が開く。

青年が何事かという顔をしている。

「跡、お前。足で開けるのはよした方がいいぞ……。」

苦笑しながら半平太が言う。

「はぁい。」

結が小さくなる。

すると、結の持っているお盆に手が伸びてきた。

結はすかさずその手の持ち主に蹴りを食らわせた。

「竜馬兄さん、先生とお客さんが先でしょ!!」

「あたたた。ほがーに怒らのうても……。」

竜馬が（# ） ブツブツ言ってるのを結は完全無視をする。

「先生どうぞ!」

お茶を結が半平太に渡す。

「ありがとう。」

・・・本当に跡はお茶を入れるのが上手だな。」

「竜馬兄さん、頼もどうぞ!!」

「ありがとう。」

「Thank you!!」

部屋にいた全員が頼に目を向ける。

「に、兄ちゃんとのありがとうって言う合い言葉だもんね……?」

「あ、あ!!そ、そうなんだよね!!」

頼と結が慌ててホローする。

「そういえば、結と頼には紹介してなかったな……。」

半平太が青年の方を見ながら言った。

「以蔵君。こちらへ来なさい。」

「は、はい。」

（いぞうくん？イ・ゾ・ウ？

えゝ！！！！あの人切り以蔵で知られる岡田以蔵！

まさか、この人は思いもよらんかった！！）

結は半平太の横でこちらに向き直った以蔵を見た。

（素朴そうな人だな・・・。

それに忠実そうな目を持っている。

スゴイぞ！！私！！

よしコレクションを・・・。）

「以蔵、これが前話した時内結と頼だ。」

「以後御見開きを。」

「何卒よろしく。」

結と頼が頭を下げる。

「岡田以蔵という。以後御見開きを。」

すかさず、結の悪い癖が炸裂する。

「あのゝ。これにお名前書いていただきたいのですが・・・。」

口は優しいが半強制的に筆を渡した。

「はあ。」

以蔵は不思議そうな顔をしたが何も聞かずにスラッと書いてくれた。

（字、うまくない・・・。以蔵さん。）

その時、寝転がっていた竜馬が不愉快そうに言った。

「以蔵にゆうて、わしにや書けて言わないがか・・・。」

結がニヤリとする。

「何？竜馬兄さん・・・。書きたかったんだー！！」

「ほがなことはないきに！！！！」



顔を赤くして竜馬が言う。

「いいよ。兄さんも書いてよ！」

別に結、竜馬をいじめてノートを渡さなかったわけではなく、時間無くて忘れてしまっただけであつたのだつた。

「時間、無くてさ！ごめんね！ほらよつと」

「ああ。」

ノートが竜馬の元にダイブする。

竜馬もさらさらと書き、結に渡した。

結はそれを受け取ると開けはなっていた襖の外に出て、縁側に腰掛けた。

空には

サンサンと

太陽が輝き、

心地よい暖かさを与える。

地には

それに

呼応するかの如く、

土筆があちこちから出ていた。

これから何が起こるのだろうか？

そして何を知るのだろうか？

きっと新しい出会い

新しい発見

ただ春の夜に咲く夢桜のように散っていく

志士たちの

後ろ姿を



## その8 夢桜（後書き）

ごめんなさい！！

私の一身上の都合により、終わらせてしまいました！！

もしかすると、復活させるかもしれません。

本当に駄文でも楽しんでくださった皆様。

本当にすみませんでしたm（――；）m

ご意見、ご感想頂けるとうれしいです！

結の幕末サインコレクション

NO 2 岡田以蔵（土佐）

NO 3 坂本竜馬（土佐）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4397a/>

---

ただ春の夢のごとし

2010年10月9日15時33分発行